様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：８２５０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３５０４０８

研究課題名（和文）市民・地域との連携による資料所在マップの作成とその活用

研究課題名（英文）Practice of eco- museum, Make a map together with civil

研究代表者
島立　理子（Shimadate, Riko）

千葉県立中央博物館・その他部局等・研究員

研究者番号：００３３２３５４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：　この研究は市民、地域の人々と連携して地域にある「資料」を掘り起こし共有することを通して、日本におけるエコミュージアムのあり方について検討する実践的な研究である。
　千葉県立中央博物館が行っているフィールド・ミュージアムにおいて、博物館行事参加者との連携、博物館・公民館・図書館との連携、地域の人々との協働調査を実施した。連携にあたっては、それぞれの機関の得意分野を活かした連携が必要であることがわかった。また、地域の人々との連携にあたっては知識を一方的に伝えるのではなく、ともに活動することで新たな資料の掘り起こしが可能となることがわかった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to make a model of eco- museum.We were attracted to the documentation of the region in cooperation with community centers and libraries .We have gathered information from the Museum of the user.We did a study of history along with the citizens .Information obtained in these activities , and share with everyone .By working with citizens , it was found that it is digging a new material .Such activity has been found to be important to the development of eco- museum .

研究分野：博物館学、日本民俗学

キーワード：エコミュージアム　地域連携　資料レスキュー　社会教育施設

１．研究開始当初の背景

エコミュージアムの理念は、その地の現在の生活や文化がどのような経緯でつくられてきたかということを住人自身が探求し、それを保存、活用、展示することを通して、理解し、再確認し、当該地域の発展に寄与するというものである。

しかし、日本におけるエコミュージアムの多くは、「生活や文化がどのような経緯でつくられてきたかということを住人自身が探求し、それを保存、活用、展示する」という側面は薄く、町づくりや観光などを目的として計画された物が多く、「エコミュージアム」という言葉だけ浸透してきた。

２．研究の目的

本研究は、地域の人々や博物館行事の参加者、地域の公民館、図書館や資料館などと連携し、地域にある様々な資料の所在マップ作りとその活用を通して、日本におけるエコミュージアムの可能性について考えるとともに、被災時における地域資料スキューのシステム作りを実践的に研究したものである。

３．研究の方法

研究代表者の所属する千葉県立中央博物館が平成 15 年度から実施している「房総の山のフィールド・ミュージアム」というプロジェクトは、房総丘陵の自然や文化そのものを「資料」や「展示物」としてとらえる博物館活動で、地域の人々と協働で資料の収集や調査・研究などをおこなうものである。

この「房総の山のフィールド・ミュージアム」で活動している小櫃川・小糸川流域にして実践を行った。博物館の行事に参加した市民や地域の人々、地元博物館・資料館、公民館や図書館などが連携して、地域にある様々な資料（分野にこだわらない）を掘り起こす作業を行った。その成果の一部は集約し、デジタル地図を作成、公開した。

これらのデータは、公民館の文化祭、博物館の企画展示などで活用した。

資料のデータを連携機関で共有するシステム作りについて検討した。

「おばあちゃんの畑」プロジェクトで実践した活動を更にすすめ、日本におけるエコミュージアム実践の１つのモデルケースとして発展させた。

４．研究成果

（1）実践内容

今研究期間に行った実践は以下の通りである。

①　博物館行事参加者との連携

博物館行事として年間 2 回の観察会を実施した。観察会の形式は参加者自身が自ら発見したものについて、参加者と博物館職員がともに観察するというもので、博物館職員からの一方的に案内をするというものではない。また、観察する対象も植物、動物、地形、化石、石仏、建造物など分野にとらわれないこととした。多くの人々で同じ地域を観察することで、多くの新しい発見があった。これらの成果は、参加者がレポートの形でまとめて博物館に提供してくれている。

②　博物館・公民館・図書館との連携

これらは、同じ社会教育施設であるにもかかわらず、お互いに何をしているのかわからないとうのが実情であろう。そのため、今研究期間においては、千葉県立中央博物館、千葉県立図書館、君津市公民館、袖ケ浦市郷土博物館、八千代市立郷土博物館と連携した事業を実施した。

この事業は博物館、公民館、図書館の連携モデルを構築することを目的として、一つのテーマのもとに各機関が連携して活動を行った。今回は「妖怪」「もののけ」をテーマとして実施した。

平成 26 年度は各機関が県内に伝わる妖怪伝承の収集を行った。その成果は「千葉の妖怪大集合」（発行：千葉県立中央博物館）として広く一般に公開するとともに関係機関が集まって「ちばの妖怪まつり」というイベントを実施して発表を行った。また、集められてた情報を集約、精査して「小櫃川・小糸川流域もののけマップ」（http://www.chiba-muse.or.jp/NATURAL/special/mononoke/）として、ウェブ上に公開している。

平成 27 年度は連携して集めた情報をもとに各博物館においては企画展示を行った。下の図は公民館などの機関と連携して収集した千葉県内妖怪情報をマップにしたもので、企画展示の際に展示した。

また、公民館においては地域の人々と一緒に伝わる妖怪伝承を素材に絵本作りを行った。これら 2 年間にわたる実践については、『千葉県の妖怪ガイド』という冊子にまとめた。

図　平成 27 年度企画展示で展示したマップ

平成 28 年度は博物館・図書館・公民館の連携に関するシンポジウムを予定している。

連携を通して、お互いの機関が実際にどのような活動をしている理解していなかったことが再認識された。それぞれの機関毎に市民や県民といった利用者との距離感が大きく違うということがわかった。

公民館と博物館における利用者との関わり方についていえば以下のような特徴がある。公民館の実施する事業は、担当として公民館主事などの職員がコーディネートすることはあっても、事業の主体はあくまで「利用者」である。公民館の職員は場の提供、情報の提供など活動を支援するのであり、決して表舞台に立つことはない。博物館にはおいて多くの場合は、展示するのは学芸員であり、観察会・講座の講師も学芸員である。

研究代表者の取り組んでいる「房総の山のフィールド・ミュージアム」は地域の自然や文化そのものを展示であり、資料であると考える。つまり展示の維持や更新、資料の管理は博物館の学芸員が主体的に行うものではない。地域の自然・文化の保全・伝承の主体は「地域の人々」であり、博物館学芸員の仕事は、これを側面から支援することである。フィールド・ミュージアムの主役は地域の人々である。エコミュージアムにおいても同様である。

フィールド・ミュージアム、エコミュージアムの実現に際し、博物館学芸員は公民館の活動、公民館主事（社会教育主事）のノウハウから学ぶべき事は多いことがわかった。

他の組織との連携によって多くの得るべきことがあることがわかったが、実際の連携を行うに際していくつかの問題点もあることがわかった。

各機関によって事業実施にあたって、対象としている人々に違いがある。公民館の事業の対象は公民館のある自治体の住民である。一般県民、あるいは県外、海外からの来館者を対象としている博物館とは違う。

また、組織によって事業計画立案の時期が違う。大きな組織ほど事業立案の時期が早く、実施にいたるまでの期間が長く必要であるため、共同で事業を行う際には各機関の置かれている状況等を互いに理解する必要がある。

③ 地域の人々との協働調査（二五穴）

地域にある資料の掘り起こし作業を地域の人々と協働で行った。

房総丘陵には「二五穴」と呼ばれるトンネル状の農業用水路が何本も流れている。これは、幕末から大正時代にかけて作られたもので、ポンプなどの動力を一切使わず、水の自然落下のみで灌漑をするシステムである。作られてから100年以上を経た現在でも現役として使われている。1960年以降、二五穴の周辺ではポンプアップによる灌漑がはじまり、新田開発が行われたが、現在ではこれらの水田の多くは耕作放棄されている。それに対して、二五穴を使う田んぼの多くは現在でも耕作が続けられている。ポンプアップに使う原油の高騰などがその背景にある。二五穴はこの地域における重要な遺産であるといえる。

「二五穴」については、『君津市史』など自治体史でも取り上げられているが、各水路がどこを通っているか正確な調査は実施されておらず、明らかになっていなかった。地域の人々にとって大切な遺産であり、水田維持に欠かすことのできない二五穴の実態を、地域の人々と一緒に調査して製作したのが下の地図である。地域の人々と協働で調査することによって、詳細な地図を完成させることができた。

図　小櫃川上流の二五穴の分布

また、二五穴が作られた当時の記録も多数残されている。地図製作の中で新しい記録の発見もあった。これらの記録類の一部については、君津市久留里城址資料館で活動している雨城古文書同好会の人々が解読をすすめた。

これらの成果については『房総のお宝シリーズ①　房総の二五穴』としてまとめた。この本については、各地からの問い合わせが多数寄せられており、地域の人々と博物館が協働で調査したことによって、地域の遺産が多くの人々に認識されるとともに、地元の人々にとってはその大切さを再認識する機会となった。

④ 地域の人々との協働調査（古文書）

地域にある資料の掘り起こし作業を地域の人々と協働でおこなった実践の二つ目として、古文書の解読作業がある。

君津市市宿地区には、江戸時代、市宿村で名主を務めた星野家の古文書が残されている。この古文書は地元の方たちによって、平成18年に発見されたものである[1]。この古文書の多くは代々の当主（名主）の日記で、市宿村周辺で起こったことが記されている。

この日記を地元である君津市清和公民館のサークル「清和の古文書を読む会」が解読を進めている。解読には千葉経済大学教授菅根幸裕氏がサークルの一員として参加している。地方文書、特に方言を多用し、地元の字名などが多く出ている日記の解読にあたっては、地元の方の知識が非常に役に立つことがわかった。近世文書の専門家だけではどうしても理解できない事も、地元の方と一緒に解読を進めることで解決する。また、地元の人にとっては、専門家と一緒に読み進める事で、地域の歴史について広い視野にたって理解することが可能になるとともに、より深く知ることができた。

このサークルの解読の成果は『房総のお宝シリーズ②　君津市市宿「星野家日記」』として公表した。

⑤　「おばあちゃんの畑」プロジェクトにおける実践

「おばあちゃんの畑」プロジェクトは、地域に残る在来作物の種子を、伝統的な農業技術とともに次世代に受け継ぐ活動である。平成20年度から実施している。

君津市市宿の畑・田んぼにおいて行っている事業で、千葉県立中央博物館と地元の団体、公民館が連携で行っているものである。

事業実施当初は博物館主体に活動してきたが、平成 24 年頃からは実施の主体を地元の団体に移行してきている。

本研究期間中大きく３つの活動について進展があった。1 つは「おばあちゃんの畑」食品加工場の活動である。「おばあちゃんの畑」の在来の作物を加工して販売するシステムである。２つ目はワークショップ「めざせ!!田んぼのマイスター」の開催である。在来の稲を伝統的な農法で育てるワークショップで、地元の NPO が主催している。NPO が主催することによって参加者から参加料をいただき、主催者側に若干の利益が生じるようなシステムができあがった。３つ目が「おばあちゃんの畑」の植物画展の開催である。植物画を描くグループによって描かれた「おばあちゃんの畑」の植物画を、公民館や図書館、他の博物館の巡回展示を行った。「おばあちゃんの畑」のもとに、いくつもの団体が活動を主体的に行っていく状況となった。

⑥　資料のレスキュー

研究期間の最終年度に千葉県内において資料のレスキューが行われた。資料の収集家でもあった郷土史家の膨大な資料が廃棄の危機となった。これまで連携をしてきた機関からの連絡によって、周辺の博物館、図書館が集まりレスキュー作業を行った。資料のレスキューは震災時だけではなく、いつでも起こりうるのだ。

（2）考察

①　様々な連携の効果

地域にある「資料」の情報収集にあたって様々な機関、人々と連携してきた。

地域の人たちに向けては、地域にあるものの大切さを一方的に伝えるのではなく一緒に活動することによって、地域の人々自身が身近な資料の大切さを再認識するようになることがわかった。そこには、公民館のような地域の人々に寄り添った接し方が必要であることもわかった。

博物館にかけている公民館の「地域の人々に寄り添った接し方」には学ぶべきものが多いが、博物館には公民館にはない「資料」を見る目がある。学ぶべき事は学び、博物館の持つ得意分野を伸ばしていくことが博物館に必要な事である。

機関間の連携に関しては先にも触れたが、お互いの機関を尊重しつつ、お互いの理解を深めることが必要である。そのためには、お互いの得意分野を知り、それぞれの得意分野を活かした連携のあり方を考えていく必要があるだろう。

②　情報の共有のあり方

研究期間の当初、それぞれの機関で同じ情報を共有することがよいと考えていた。しかし、機関によって知りたい、あるいは知っておくべき情報が違うことがわかった。

それは、機関によって対象としている人々が違うこと、対象としている情報が違う事に起因する。「どこに、聞けばわかるか」「どこに、何の情報があるか」という情報を共有しておけばよいのである。

③　モデル事業としての「おばあちゃんの畑」プロジェクト

繰り返しになるが、フィールド・ミュージアム、エコミュージアムは地域の人々の主体的な活動によって成り立つ。そこにおける博物館の役割は側面からの支援であり、学術的な裏付けを行うことである。

当初博物館主体ではじまった「おばあちゃんの畑」プロジェクトであるが、徐々に主体を地域の人々に移し、現在では博物館主体の活動ではなくなっている。また、博物館が主体から外れた事で、多くの団体が活動に参加し、活動それ自体が大きくなってきている。

更にワークショップ「めざせ!!田んぼのマイスター」の主催団体である NPO は、この事業にとどまらず、地域の自然を多くの人に伝えるワークショップの実施を計画しはじめた。フィールド・ミュージアム、エコミュージアムが地域主体で動き始めている。このような展開から、「おばあちゃんの畑」プロジェクトは日本におけるエコミュージアム実践の１つのモデルケースになったといえるだろう。

④　資料の保全の問題

フィールド・ミュージアム、エコミュージアムにおける博物館の大きな役割に資料の保全がある。地域にあるもの全てが資料と考えるので、資料の保全の担い手は地域の人々である。

しかしながら、様々な理由により地域で保全することができなくなることもあり得る。そのような時に、その後の資料の事を考えるのが博物館である。有形の資料の場合は資料の収蔵先を探す必要が生じる。

情報の共有で大切なのは、「地域で保全することができない」という情報をいち早く共有し、連携してレスキューに入る体制を作ることである。

人的な支援はもちろんであるが、レスキューにあたっては収蔵先を見つけることも重要である。

一群の資料は一カ所の博物館が一括で収蔵するのが理想であるが、現在の各博物館の収蔵庫の状況では難しい。機関間で連携・相

談して分割収蔵する必要がある。そのためにも、日頃から地域に活動する機関の連携や情報共有、また地域を越えた様々な機関との交流が大切である。

〈引用文献〉

1　島立理子・木曽野正勝「一五〇年前の畑を探るー「おばあちゃんの畑」プロジェクトの成果ー」千葉県立中央博物館研究報告 人文科学 11(1), 67-89, 2009-03

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　４　件）

西谷大,島立理子,大久保悟「共同研究「日本の中山間地域における人と自然の文化誌」中間発表」　『国立歴史民俗博物館研究報告』第 186 集　査読有　2014.3　pp.295－309

上田大斗,大久保悟,島立理子,西谷大
共同研究「日本の中山間地域における人と自然の文化誌ー蔵玉・折木沢用水の立地と水田耕作の関係ー」　『国立歴史民俗博物館研究報告』第 186 集　査読有　2014.3　pp.311－319

八木玲子　「地理学を活かす博物館活動ー千葉県立中央博物館の展示と「地域」を見る観察会の実践からー」　『お茶の水地理』　第 55 号　査読有　2016.3　pp.1－10

島立理子　「房総の二五穴」　『HUMAN』８巻　大学共同利用機関法人人間文化研究機構　査読無　2016.3　pp.116－127

〔学会〕（計　４　件）

島立理子「千葉県立中央博物館のおばあちゃんの畑プロジェクト」（歴博国際シンポジュウム「日韓比較民俗学の新視点」新宿明治安田生命ホール　2013.12

島立理子「千葉県立中央博物館におけるフィールド・ミュージアム」（韓日学術交流会報告会　「地域と博物館」　大韓民国国立民俗博物館　2013.9）

島立理子「公民館大会　公民館と他の社会教育施設との連携につて」（千葉県公民館連合会大会）千葉県芝山文化センター　2914.11

島立理子「博物館と地域・公民館・学校との連携活動「おばあちゃんの畑プロジェクト」について」（現代民俗学会 2015 年大会シンポジウム）成城大学　2015.4

〔図書〕（計　３　件）

島立理子「「おばあちゃんの畑」プロジェクトを通した食の日韓比較試論」
『日韓比較民俗研究の新視点ー博物館型研究統合の現場からー』　国立歴史民俗博物館刊行　2014、pp.111－122

島立理子、小田島高之、八木玲子他著『房総のお宝シリーズ①　房総の二五穴』　千葉県立中央博物館刊行　2014

菅根幸裕、島立理子、木曽野正勝他編著『房総のお宝シリーズ②　君津市市宿「星野家日記」』千葉県立中央博物館刊行　2016

〔その他〕

ホームページ等
http://www.chiba-muse.or.jp/NATURAL/special/mononoke/

６．研究組織

(1)研究代表者

島立　理子（SHIMADATE, Riko）
千葉県立中央博物館　主任上席研究員
研究者番号：00332354

(2)研究分担者

八木　玲子（YAGI, Reiko）
千葉県立中央博物館　主任上席研究員
研究者番号：00250134

小田島　高之（ODAJIMA, Takayuki）
千葉県立中央博物館　主任上席研究員
研究者番号：70250131